

「最期は家で迎えたい」

自宅療養を望む患者の在宅医療を支えようと、長崎市内の開業医が「長崎在宅Dr.（ドクター）ネット」を結成し二十四時間態勢の往診をしている。国民の約六割が住み慣れた自宅で人生の最期を迎えたいと望む中、県内で自宅で亡くなった人は十人に一人に満たず、全国で二番目に低い。開業医らの取り組みがこうした現状をいかに打開するのかが注目される。

（報道部・西村伸明）

ドクターネットは二〇〇三年三月、医師の負担を分散し在宅医療のニーズに応えようと十三人の開業医で発足。現在は五十五人に増えた。一人の患者に主治医と副主治医を決めるグループ診療が最大の特徴。眼科や皮

在宅医療支えるドクターネット

膚科など専門性が高い協力医（十九人）も必要に応じ往診。市民病院など十七病院、訪問看護師などと連携している。

長崎在宅Dr.ネットの仕組み



長崎市内開業医 24時間態勢で往診

患者の思いに寄り添う



人工呼吸器をつけた女性を往診する安中医師（右）と影浦医師
＝2月2日夕、長崎市内

「（高タンパク食品を）どのくらい入れたほうがいいかな」
「食欲はありますが」「これ以上悪くなったら入院も考えないと」

長崎市でこの冬初めて積雪を記録した今日二日夕。同市内の女性（八〇）の自宅で、主治医の安中正和医師（三〇）と副主治医の影浦博信（四〇）が女性のベッドを囲んだ。

女性は昨年二月、肺結核の後遺症で人工呼吸器をつけたが、四月に本人の希望で自宅に戻った。今年に入り血液内のタンパク質が減り、体のむくみや心不全の兆候が出ていた。安中医師らは入院を見送り、高タンパク食品の投与を決めた。

事務局長の白髭豊医師（四五）は「副主治医がいることで低い（全国平均12・4％）」。自宅療養が難しいのは家族の負担や不安に加え、開業医が一人で重症の在宅患者を診る負担が大きいため。特に坂道や狭い路地が多い長崎市は往診が難しく、自宅で亡くなる割合は8％にとどまる。

同ネットはこれまで二百二十四人を自宅に戻した。七十一人が亡くなったが36・6％に当たる二十六人は自宅で見送られた。同じ取り組みは大村市や秋田市で始まり、諫早市でも導入される。

女性が寝起きする八畳の居間には仏壇があり、亡き夫の遺影が見守る。家族の女性（六〇）は話す。「最期だと思って自宅に戻したら元気になったんです。医師が二人いるので安心。できる限り自宅療養を続けたい」。代表の藤井卓医師（五〇）は「在宅医療を希望する患者が医師がいけない理由で自宅に戻れないケースをなくしたい」と話す。同ネット事務局は白髭内科医院（電0950-826211-10620）